

第 24 回 福祉工学カフェ 開催報告

国立研究開発法人 新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)及び国立障害者リハビリテーションセンター研究所は、2020年10月26日(月)に第24回福祉工学カフェを開催いたしました。

福祉工学カフェは、障害のある方の就労、余暇活動を含む様々な生活場면을支援する福祉機器の存在が不可欠であるものの、福祉機器が他の一般的な機器よりも効率的な実用化が進まず、なかなか普及しないというジレンマから、福祉機器ユーザーの方々と研究・開発に携わる方々の情報共有の機会を提供するイベントです。

福祉工学カフェを開始して11年目となる2020年度は、新たな試みとして、年度を通じて共通のテーマについて3回に分けて開催することといたしました。今年度のテーマは、ウィズコロナ及びアフターコロナの社会を加味し、主に視覚に障害のある方を対象として「誰もが安全に生活できる“新しい生活様式”のあり方」を取り上げます。第1回目は、視覚に障害のある方々からニーズを収集する「着想」フェーズの回を開催し、障害当事者の方々によるご講演の後で、参加者の皆様からのご質問にお答えする形式でパネルディスカッションを行いました。ご講演とパネルディスカッションのトピックスの中から一部をご紹介します。

【視覚に障害のある方の属性の変化】

近年、視覚に障害のある方の属性が変化しており、加齢性黄斑変性や糖尿病網膜症等の疾病により途中で視覚に障害がある方が増え、歩行訓練等を受ける方が高齢化^{※1}している現状をお話いただきました。このため、デジタルネイティブ世代の若い方々はスマートフォンなどのIT機器を支援機器として利用する一方で、IT機器の操作に不慣れな高齢の方々はIT機器の操作が難しく、操作がシンプルで分かりやすい機器やソフトウェアを求めているという話をいただきました。

※1 歩行訓練等を受けられる方が高齢化している背景の一例として糖尿病があります。糖尿病網膜症は、平成2年に行われた厚生労働省糖尿病調査研究班による合併症調査によると、50～60代の糖尿病患者のうち38.3%の割合で網膜症を合併していると報告しています。

【全盲とロービジョン^{※2}では支援機器のアプローチが異なること】

全盲とロービジョンは視覚に障害があるという意味で同じように考えられてしまうことがあります。ロービジョンの方の場合は、「残存した視力を活用」しながら支援機器で補間するという全盲の方とは異なるアプローチが必要という話をいただきました。また、残存した視力については人により視界等が異なるため、利用しや

すい支援機器も異なるので、カスタムメイド等個人にあった商品提供が必要であるというご要望もありました。従来、視覚に障害のある方向けの支援機器は、全盲の方向けの開発が多かったとのことですが、実際は視覚に障害のある方々のうち約8割の方がロービジョンということで、ロービジョンの方向けの支援機器の強化を求めのお声もいただきました。

※2 世界保健機関(WHO)の定義でロービジョンとは、矯正眼鏡を装用しても「視力が0.05以上、0.3未満」の状態のことを示します。

【新しい生活様式による生活の変化】

新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、生活様式が変化したことで支援を受けられる際に躊躇されたことや、今までできていたことができなくなったというお声もいただきました。今回、ご登壇者の方々からいただいた事例の一部をご紹介します。

- ・ 駅などで周囲の方が手引きをお申し出くださった時に、肩やひじにつかまることを躊躇するようになったこと
- ・ 公共交通機関の車内での会話を控えるようになったため、手引きしていただく時に、無言でバックを引っ張られることがあること
- ・ 店頭で買い物をする際に、店員の方が声による挨拶ではなく、笑顔による挨拶をされるようになったため、キャッシャーの方がどこにいらっしゃるのか音で認識できない場合があること

最後に、福祉工学カフェの事務局としての気づきについてです。今回、ご登壇者の方から視覚に障害のある方が料理など何等かの連続した作業をする時の工夫として、同じ立ち位置のまま一連の作業を終わらせることができるように工夫しているというお話もいただきました。実はこのような工夫は視覚に障害のある方だけでなく、肢体不自由等の他の種類の障害のある方の場合でも共通する内容ですが、シーズ視点の方から新たな気づきを得たというお声をいただきました。ニーズ視点の障害当事者や支援者にとっては当たり前となっている暗黙知の部分を福祉工学カフェという場を利用して「言葉で伝えること」で、シーズ視点の方々に新たな気づきを得ていただくことができるという点に気づかせていただきました。今後も少しでもニーズ視点の福祉機器のユーザーの方々と、シーズ視点の研究・開発に携わるの方々をつなげられるよう福祉工学カフェを運営してまいります。

※ 2021年1月4日一部修正